



露伴全集

第十八卷

昭和二十四年十月五日印刷  
昭和二十四年十月十日發行

露伴全集第十八卷

頒價五百圓

著作權者

幸ユキ

田タ

文フミ

編纂

蝸カメ

牛ウシ

會カイ

發行者

東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地  
岩波雄二郎

印刷者

東京都西多摩郡靈村根ヶ布三八五番地  
山田一雄

印刷所

東京都西多摩郡靈村根ヶ布三八五番地  
大化堂

發行所

株式會社

岩

波

書

店

東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地

電話(代表)九段(33)二八七番  
振替口座東京七四四一六番

# 目次

## 水滸傳

水滸傳の批評家 大正七年七月

水滸傳各本 大正十二年一月

## 支那小説

支那小説 大正十四年十二月

古支那文學に於ける小説の地位 大正十五年九月

支那文學と日本文學との交渉 大正十五年十一月

怪談 昭和三年九月

圈外文學漫談 昭和三年十一月

三

二〇

三一

三九

四五

八五

一〇七

墨子 昭和四年七月

歌合 昭和七年六月

圏外の歌 昭和八年四月

道教に就いて 昭和八年五月

明治初期文學界 昭和八年十一月

道教思想 昭和十一年七月

雲南 昭和十三年十月

仙書參同契 昭和十六年九月

後記

一七一

二〇五

二二一

二四五

二八九

三〇九

三六一

四一七

四九三

水滸傳



## 水滸傳の批評家

水滸傳が支那文學の中で除くことの出来ない一つの著作であることは云ふまでもない。併し支那文學では、もし文學が人間の精華であるならば、支那に於ては小説などはしばらくさしおいて論じないが至當で、詩であるとか文章であるとか、さういふものの分科に屬する種々の科目の話をして、それから後に戯曲等に及び、戯曲等の話もして後に小説に及ぶべきである。支那に於ては小説は文學の中で低級な地位を占めてゐる。今日の人は文學と云へばすぐ小説等を云出すけれども、支那に於ては少くも小説等は最後に談すべきもので、決して西洋諸國に於ける如く、又今日の世界に於ける如き調子合を以て卒然として支那小説に臨むべきものではないのである。もとより支那に於て小説は卑まれてゐるものであり、又卑しいものである。

それで唐宋時分の極古い小説といふものは、まだしもその幼稚なるにもかゝはらず、品位も宜しく、作者も好いが、その後の元あたりから出て來る所謂讀本體よみかたの小説に至つては、品位も悪く、したがつてその作者も自ら何の某の作であると銘を打つさへ憚る位のものである。その位、文壇に於て輕微な



位置を占めてゐたものだから、かの名高い水滸傳にしる、西遊記にしる、金瓶梅にしる、大凡その作者は分つてゐるにしたところで、異説があつたり、明らかに考證することが出来なかつたり、或は又ことさらに著者の名を隠蔽した傾向がある位である。それゆゑ支那文學史を談ずるに當つては、さう小説に重きを置く譯に行かない。種々の科目を談じて後、小説に及ぼす方が好い位のものである。けれども既に小説を談ずるとすれば、水滸傳はどうしても最先まうさきに出て來なければならぬ、明らかに支那小説の巨頭である。その水滸傳の作者も、羅貫中であるの施耐庵であるのと云つて不明な位ではあるが、とにかく小説界の巨頭には相違ない。したがつてそれに對する批評も段々とあることはあるが、たゞ片々たる一篇の文字を以て評したのは幾人もあり、また種々の書物の中にも見えてゐるとして、それに頭からしまひまで大きな注意を拂つて、細かい批評を試みたものは幾種もない。

先づ金聖歎の水滸傳評といふものが、その本が澤山世間に流通してゐるために、多くの人の眼に觸れてゐる。そして又、その批評の文章が面白く、趣意が奇抜で、本文を離れた批評そのもののみでも人を引つけるに足りる力がある位なために、多くの人に愛讀されてゐる。中には、この金聖歎といふ男がひとり水滸傳のみならず、西廂記であるとか、その他軟派のものものの批評をしたり、又古文の批評をもしたり、盛に文學評論をやつてゐるので、その文字の華麗なると、意味の奇警なのに魅せられて、或は謬つて大批評家のやうに思ふ人もある。併しながら金聖歎といふ人が、それほど大批評家でも

何でもない、ことに古い文章や詩の評論に至つては、所謂知つたかぶりで、あぶなげなものとして老先生達は看做してゐる。小兒事を解する風をする奴で、水滸傳の批評篇ばかり見てゐると、金聖歎もえらさうに見えるけれども、ナアニそれほどのものではない。併しこの男は何しろ才はある男で、そして舌は轆轤の如くとも云ひたいやうに、巧いものを云取る才があつて、變な理窟でも何でも面白くひねくる、そして丁度俗衆の痒い所へ孫の手を當てるやうな技倆に富んでゐる。そのために餘計買被られる。それから又、この男が終には殺されてしまつたなどといふ事實が、人をして好奇心を唆らしめる。又その殺される時に當つて、首を切られるのは痛事だ、併しこのめんどくさい世の中を一足飛びに出てしまふのは快事だ、痛快と云つて死んだといふことが傳へられてゐる。そんな話はどうせかも知れないが、先づさういつた調子で普通の人に愛讀されてゐたのは事實である。

それから又、彼が評した水滸傳そのものが、元來普通の人にとつても幾何か愉快を感じしめる傾向に出来てゐる。そして、その作者の筆才はもとより上品なものではないが、人の胴骨へ喰込むに足りる鋭さをもつてゐる。いかにも疎枝大葉的の書き方ではあるが、人情世故の機微に觸れてゐて、人をして思はず案を拍つて快を呼ばしめるだけのものがある。さういふ著述に持つて行つて、一種の奇異なる才子の聖歎が縦横無忌憚の評を加へたのだから、丁度檜の大きな材木へ石油をぶつかけて、それに火をつけた感がある。そこで評と併せて讀むと、刺激に飢ゑてゐるやうな人間にはアルコホル分の

強いものでも盃にしたやうな感がある。で、愈々金聖歎をして水滸傳の作者と同じくこれも亦一箇の快人であると思はしめるやうになる。水滸傳中の人物、それは人殺しや放火ひっぱなどを手際好く愉快に行ふ、それと同じ比例にその作者、その批評家を皆面白い人物だと思ふやうになる。

ところで、金聖歎の水滸傳評といふものが果してそれほど價值のあるものであらうか。もし聖歎ばかりが水滸傳を評したなら、絶対に第一位を與へて好いかも知れない。が、外にも水滸傳を批評したものはある。たとへば王望如といふものも評してゐる。ところがこれは聖歎に比してお話にならない、イヤハヤ下らない、筆もろくたに廻らない、眼も先づ無患むくろせ子位なもので、面白くもないへつたくれである。それゆゑ口にするものもない。それだけかと云ふと、こゝに聖歎にとつては埋没されてゐる方が好いのだが、引摺出して見ると聖歎よりも上手うけてなものがある。それは誰であるかと云ふに、時代も聖歎よりは前に於て出た男、即ち明の李卓吾といふものである。この李卓吾のどういふ人物だといふことを考へて、それから又李卓吾の水滸傳批評以外の種々のものを讀み、その一生の行爲を見、そして金聖歎に比すると、聖歎といふ男は大にその光輝を失してしまふ。それはなぜかと云ふと、だんだんにお話するが、先づ聖歎の方が李卓吾の弟子か影法師かといふ位置にゐるからで、聖歎と卓吾との全體の比較をせずに水滸傳の批評だけを比較して見ても、聖歎の批評の普通人をして快を呼ばしめるものは多く、お氣の毒だけれども李卓吾に負ふところがあるからである。なぜが卓吾を云はずして

聖歎を擧げ、水滸傳と云へばすぐその批評を聯想せしめ、したがつて聖歎を大批評家でもあるやうに思はしむるに至つたかと云ふと、卓吾の評は本が少いので多くの人の眼に入ることが少い、聖歎の方は本が流通してゐて水滸傳と云へば今日では聖歎本の水滸傳が水滸傳になつてゐる位なのである。それがために水滸傳の話をすると云つても先づ聖歎に掩はれてゐて、聖歎を通して頂戴してゐるやうな實際の事情なので、聖歎獨り舞臺で大見得を切つて威張つてゐるやうになつた。もと／＼水滸傳といふものは、その作者さへ羅貫中だか施耐庵だか分らぬ位のもので、韓退之の文章とか柳宗元の文章といふやうに、ハッキリ成立つてゐるものではない。それゆゑどれが眞の水滸傳であるやら分つてゐない。私がかうやつてお話ししても、お恥かしい話だが一番古い水滸傳、即ちオリヂナルの水滸傳といふものは未だ手にも入れず、見たこともない。困つた話で、作り變へたものを原始のものとして論ずるといふことは明らかに間違つてゐる。ところでどれが原始の本だと云ふと、それは明の時に大變稀になつてゐるといふことが、胡氏の文章に見えてゐる。明の人が既に稀になつてゐると云ふのだから、それはどこかにあるかも知れないが、餘りお目に掛つたと云ふ人の話も聞かない。そこで今日流通してゐる聖歎本は、以ての外不埒極まる本で、批評の都合や本屋のためか何かで、百二十回もあるものを七十回にしてしまつてゐる。それにその仕方が、寫眞まに撮つて全體を詰めるといふやうなら好いが、さうではなくて、兎なり鶏なりを腰の所あたりからよい加減にぶつた切つて、これ面白き一の活物で

あるとしたのだから堪らない。そしてその切つてしまったことが、自分の批評を成立させる都合を好くした、驚入つた無茶なものだが、それでゐて支那流のことだから己が切つたと云つてはいけなから、古本を得た、これが即ち眞本だ、眞本はかくの如きものである、だら／＼長い百二十回もある奴は俗本といふことにして、一篇の批評を成立させてゐる。

併しながら問ふに落ちず語るに落つるで、自分の本を古本だ／＼と云ふにつけて、自分の本が出る前に、俗本であるか非眞本であるか知らぬが、何にせよ所謂聖歎本と違つたものが存在してゐたことを語つてゐる。今存在してゐる聖歎本の前には、百二十回の本が一種ある、それから百回の本がある。そして、この聖歎といふ男が水滸傳を胸切にしたのは、眞に奇抜な批評家で、しかもその腰斬にしたために自分の批評を成立させるといふことは随分洒落たやり方だが、實はこれも聖歎が發明したのではない。既に明の時に百回本がある、即ち百二十回本を二十回だけ抜かしたので、随分亂暴な話だが、さういふやり方があつたので、聖歎がそれに倣つて又三十回だけ減じた。辯護する方から云へば何も初めてさういふ悪いことをしたのではなく、二代目だといふことになるが、褒める方から云へば折角の大手術も、實は昔の本屋の弊に倣つたと云ふことになり、少し困るのである。で、この百回本及び百二十回本は今日でも存してゐて、それにはいづれも李卓吾の批評が附いてゐる。ところで、今日ある本の中では先づ百二十回本が最も元の水滸傳に近い譯であるが、前に云つた胡氏の眼にした本の最

も古いものは、胡氏自身既に、近頃お目に掛らんと云つてゐる位なのである。最初の水滸傳といふものは、一體いつどこで出来たものか分らない。もと／＼前にも申した通り、小説は社會低級のもので、本屋が二十回引こ抜かうが或は批評家が五十回引こ抜かうが、兎や鶏の彫刻物の耳を半分切つたり足を一本取つたりしても、原作物のために歎息する人も憤る人もないといつたやうな譯で、何のことはない、安羽子板の押繪がデコ子さんの手先に處理されても叱るお母さんがないといふ理窟である。

しからばなぜ金聖歎はそんなに五十回も取去つたかと云ふに、聖歎以前に存してゐた水滸傳では宋江といふものが忠義のものになつてゐる、卷中の主人公は盜賊の大頭だが忠義の心があつて、已むを得ずして盜賊になつた。けれども心の底には忠義の心があつて、又非常に聰明な男である。聰明な男であるからして朝廷のために盡力しても結局どうなるかといふことを知つてゐる、そして朝廷のために死んでしまつたといふことを書いて、人をして怫々として感激せしむるやうになつてゐる。さういふ作の精神に實際はなつてゐるし、又前人の評もさうなつてゐる。が、その後を襲つたのでは一向詰らんことだし、手際の見せどころがないから、そこで所謂翻案をやつて、出来上つたものを引くり返した。定案を翻すのが翻案であるから、裁判なら被告は悪いものであるとか善いものであるとか定まつてゐる、それを引くり返せばそれは翻案である。聖歎は一の翻案をやつたので、先づ忠義水滸傳といはれてゐる忠義などは囚はれてゐる奴で面白くねえ、宋江もすることはまことに穩當で、山賊の頭

にはなつたが、いかにも禮儀正しく、君子人に描けてゐる、こいつを徹頭徹尾悪い奴で王莽見たいな、弱いことも弱しい狡いことも狡いし、粉飾の非常に巧な、陰險な、煮ても焼いても喰へない厭な奴にした。忠義水滸傳を引くり返したのだが、それには全體が現はれて來ると都合が悪いから、いゝ加減な所で扉を立て、これから先は古本には無いんだぞといふことにした。奇抜と云へば奇抜で、こんな批評家の大自由にあつては、ひとり宋江ばかりでなく李逵だつて林冲だつて敵ふ譯のものではない。古本で云へば國のために忠を盡して生命を犠牲にして、なほかつ百戦の後に功を賞されるどころか、毒酒をさへ賜はつて、そしてその酒を毒と知りつゝ飲んで死んでしまふといふやうに、宋江を斃してある。さういふところが出て來ては、聖歎の評には都合が悪い、どうぞして毒の方は子分だけにでも飲まして、自分は寶でも澤山持つて爪哇國へでも逃げて行くことにしなければ始末がつかない。そのため七十回以後は切つてしまつたのである。宋江の人物をさういふやうに偽君子、偽道學、偽英雄、奸物としてしまひ、それに従つてゐる黒旋風李逵であるとか、豹子頭林冲であるとかいふやうな人間は、皆愉快なところの、赤裸々な自己の性格を發揮した立派な人間であると批評して、人をして拍手せしめたのである。そのやり口は巧と云へば眞に巧である。ところで聖歎の所謂古本の偽であることは明らかで、聖歎以前の本を見ればどうしても種々な點があつて、百二十回本の方がまだしも原作に近いといふことは争へない。さてさう云へば聖歎は評に於ては少くも獨自一家の天下を開いたやう

であるが、これが又、實はさうでない。例の七十回に腰斬したのも、百回に二十回だけを切取つた眞似であるが如くに、宋江をそんな悪者にして黒旋風や花和尚を上乗の人間にして評したのも、自分一家の天地をこしらへたのではなく、前人の糟粕を嘗めたのである。李卓吾といふ男が抑も水滸傳を假りて道學先生を罵り、程朱の教に齒を剝出した小犬のやうな姿を示した男なので、黒旋風や行者武松、赤髮鬼のやうな厄介な人間を極力褒めちぎつて、上乘の人間であると云つたそのやり方は、實は聖歎の發明ではなくて、李卓吾の發明なのである。聖歎は李卓吾の眞似をして水滸傳を評し、なほその勢を強くして到頭宋江までも罵るに至つたのである。卓吾の評を讀み味つて見れば、聖歎の評のもとづくところは十中七八、彼に依傍したものだといふことが明らかである。卓吾はもとより聖歎のやうに細かく評さない、又あれほど大袈裟に筆を揮つてもゐない。今存在してゐる百二十回本なり百回本なりを見ると、卓吾の評がよく窺へるので、先づ聖歎のために祖師となつたことが何人にも明らかに感ぜられるのである。卓吾の評は百回本で見ることがよい。

さて、この卓吾といふのはどういふ男かと云ふと、これが抑も變な人間で、聖歎も先づ道學先生に齒を剝出してゐるが、その方に掛けては卓吾の方が遙に強い。卓吾の方はさういふ料簡方が根になつて、終には水滸傳をいぢり出したといふやうな譯で、一體卓吾といふ男が、やはりこれも牢なぞへ入れられて碌でもない終りを遂げる、さうでもならなければ落着きのなかりさうな男である。人間の全



體から云つても、その狂妄の度に於て聖歎卓吾とも似たものであらうが、卓吾の方が全體に於てやはり祖師である。一體、卓吾といふやうな人間の出るに至つた所以を論ずると、明の士人の間に流れてゐた一代の思想の狀態に論及しなければならぬが、先づ大體から云ふと、明の時代といふのは一方には程子朱子を尊び、さなくば或は陸象山、王陽明等の聖賢哲に依傍する學風が行はれて、それが士君子のことを掩つてゐたやうなものである。又一方には前の時代の宋に對する反抗や、或はこれに勝たんとする感情や、さういふものが根となつたものか知らんが、やゝもすれば自ら尊大にして宋人を抑へ、これを凌駕せんとする風が、文藝上にもまたその他一切に於て見えてゐる。その極、妙にぬちれて、所謂道學先生なる名目を以て宋以來の性理の學者に冠せ、その學を奉ずるものにもこの稱呼を與へて、それを一種の不活潑な因襲的のものとし、これを侮り、己れ自らは老莊學といふのでもないが、曠達不羈なところを以て、ギツパ廻して威張りたいやうな、又風流洒落に浮世面白く快活に渡るといふことを大變好いことに思ふ、やゝ老莊臭いやうな傾向があつた。明以前の學者にも洒落たものは老莊も讀まうし佛書なども見たであらうが、明に至つて漸く盛になり、一方で著しく程朱を尊信する代りに、一方で著しく道學先生を厭ふといふ思想が流れてゐた。これは明人の一種の氣風で、この卓吾はその道學先生を著しく嫌ふ方の一方の親分であつた。

この人間の云つたことや又したことに就いて考へて見ると、餘程をかした景色が見える。先づどう